正しい批判はいかにあるべきか（四）

――教条主義批判を装った修正主義――

山本二三丸

まえがき
第一節　予備的注意
第二節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）……（以上、第二十一巻第一号所載）
第三節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その二）……（以上、第二十一巻第二号所載）
第四節　榊氏による拙者『構造改革論批判』の批判（その三）……（以上、第二十一巻第三号所載）
第五節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）……（以上、本号所載）
第六節　榊氏による修正主義批判
第七節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義
むすび

第五節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）

一

榊氏は、その攻撃論文の「三」の末尾で、「山本氏の教条主義的『超革命主義』（?）の立場をしめす一例を紹介し

ておこう」（（？）―榊氏）と述べ、つづいて「独占資本を『強め』、労働者を『弱める』」という奇妙な題名の「四」の冒頭で、まず、

「わが国の『構造改革』論者が『ひとにぎりの独占体』という口実で『なしくずし革命』論を説いてきたことに関連して、山本氏は『批判』をこころみている。そのばあいの論点とは、だいたいつぎのようなものである。」

として、拙著『構造改革論批判』の結章「総括」のなかの「階級構成」にかんする記述の中のほんの一部分をとりあげ、もっぱらこれを「拠りどころ」として、徹底的な非難攻撃を展開していられる。榊氏の「論点」は、だいたいつぎのようなものである。

まず、山本の「階級区分」の仕方は誤りである。とくに「労働者階級」をば「モノやカネを持っていない、無一物の者」ということで「規定」しているのは、根本的欠陥である。そのために、山本は、「独占資本の力を『強め』て描き、労働者階級の力を最小限に『切りちじめ』『弱め』て描きだす」ことをして、これで「構造改革論」を批判したつもりになっているが、大まちがいである。山本は、労働者階級の中でも大衆投資家となっている者は小ブル的意識をもっているとか、「中間階層」も独占の「支柱」だなどといっているが、これは、労働者がその「地位」によってひとりでに革命的になり、「中間階層」も反帝反独占の民主主義革命の一翼を狙うことができるということを否定しているもので、こういう主張は、「統一戦線の可能性の封殺というまごうことなきセクト主義」であって、完全な誤謬であり、きわめて「危険な路線を指向している」ものである。

ごらんのように、ここでは、「階級区分」の問題、「階級意識」の問題、「中間階層」の役割の問題、「構造改革論」批判の問題、「政治路線」の問題というような、きわめて重要な諸問題がとりあげられ、それらの問題について

の山本の説明はすべて誤りであり危険なものであって、榊氏の正しい見解とは真っ向うから対立しているものだということが、力説されている。それゆえ、この榊氏論文の「四」と「五」は、氏の批判の仕方をもっともよく示す模範でもあるし、また、右の重要な諸問題についての榊氏自身の考え方をもあますところなく伝えるものとして、まことに貴重な価値をもっているといわなければならない。そのために、われわれの検討も、いきおいきわめて慎重にならざるをえない。ここでも、拠るべき第一の基準は、なによりもまず事実である。できるだけ事態を客観的に、正確にとらえていただくために、わたしはつぎのような順序で議論をすすめていくことにしたいと思う。

まずはじめに、榊氏が非難攻撃を加えていられる拙著の一部分だけでなく、問題に関連ある個所を、いいかえれば、その結章「総括」の「1」から「5」までの内容を、できるだけ忠実にかかげる。つぎに、榊氏の批判論文の「四」と「五」、つまりその最重要部分を、全文あますところなくかかげる。

こうして忠実に再現された両者を読みくらべることによって、だれでも正常な論理的能力の持主であるかぎり、榊氏が拙著の内容をどのように読んで、どのように理解されたか、いいかえれば、どこを飛ばして読み、どこを意識的にすりかえ、偽造されたか、どこを読みまちがえられたかということが簡単にわかるであろうし、また、榊氏自身の議論の運び方がどのようなものであるか、いいかえれば、氏の概念現定がどんなにアイマイ、ヅサンであるか、氏の思考方法が小ブル的俗物のそれとどんなに完全に一致しているか、氏の論理が、どんなに支離滅裂、とりちがえと飛躍の連続に終始しているかということも、眼のあたりありありととらえることができるであろう。

両者の忠実な再現のつぎに、わたしは、両者の内容を冷静・客観的に比較検討して、とりあえず重要な、二、三の論理的帰結をひきだすことにしたいと思う。

二

わたしは、この機会に拙著の中での議論の展開の仕方を説明しておくことが、このさい適切だとかんがえる。というのは、問題の結章「総括」の意味を正確にとらえてもらうためにもそれが必要であるし、また、「構造改革論」を「なしくずし革命論」だとする榊氏の批判の正否を見きわめる上にも、さらに「わが国のマルクス・レーニン主義者」の主張する変革路線と「構造改革論」とはたしてどこか本質的にちがうかということを正しく判断する上にも、それが適当な材料のひとつを提供することになると思われるからである。

わたしは、第一章「『構造改革論』とはどういうものか」において、まず、「構造改革論」者の唱えている「構造改革」という言葉がどういうことをいいあらわしているのか、その言葉の直接的な意味を検討し（第一節「『構造改革』の意味」）、つぎに、「構造改革」論者自身が「労働者階級の指導する広汎な反独占統一戦線に結集した勤労大衆が独占ブルジョアジーとたたかい、かれらを政治的に孤立させ、経済的によわめ、階級的な力関係をかえ、独占支配を終局的に打倒するための条件をつくりあげていくたたかい」であるとする「構造改革闘争」そのものの内容が具体的にどのようなものであるのかということを追究し（第二節「『構造改革』の具体的内容」）、さらに「マルクス・レーニン主義の基本原則」である「強力と独裁の方法」からのこのような「平和的・民主的方法」への転換、つまり修正を合理化しようとして「構造改革論」者が列挙する三つの「条件」、すなわち、「国家独占資本主義」、「政治的民主主義」および「戦後世界の構造的変化」を仔細に吟味する（第三節「『構造改革』の条件」）ことによって、「構造改革論」そのものの基本的内容を明らかにすることにつとめ、さらにそのうえで、「構造改革論」者のもっとも主要な理

論的支柱となっている「平和革命論」の本質をば第二章で究明し、これによって、「構造改革論」の理論的性格がどのようなものであるかということを明らかにしている（第三章「『構造改革論』の理論的性格」）。だが、「構造改革論」にたいする正しい批判をおこなうためには、その主張の内容そのものの吟味だけではとうてい不充分であって、そのためにはどうしても、「構造改革論」が必然的に生れてきたその「根拠」を明らかにしなければならない（二九七ページ）のであって、わたしは、このような厳密な意味での批判をなしとげるために、とくに最後に第四章「総括」をもうけ、その冒頭において、

「『構造改革論』が戦後のこの時期になぜ必然的に生れたか、なぜそれが一部の者のあいだでもてはやされているかということを考えるためには、まず『構造改革論』そのものの基本的内容をとらえたうえで、その内容との関連において、それが生れるにいたった歴史的背景と、それを生みだした独特の思考方法ないしは発想法という、二つの側面について検討することが必要である。」（二九九ページ）

と述べ、第四章の「1」でまず、その「歴史的背景」をあきらかにすることにつとめ、ついでその「2」で、つぎのように説明をはじめているのである。

「『構造改革論』という独特の変革路線がうちだされるためには、資本主義国内部の階級関係についての一定の認識、いいかえれば、事実についてのそれ特有のとらえ方がなければならない。資本主義の実際をどのように認識することによって、またどのような認識をもととして、『構造改革論』がつくりだされたか？　その独特の思考方法または発想法を端的に示しているのは、例のきまり文句、『ひとにぎりの独占体にたいする広汎な労働者階級と勤労大衆の先制的なたたかい』という言葉である。

いうまでもなく、資本主義の社会主義への主体的変革、つまり社会主義革命の路線を正しくうちだすためには、まずもって資本主義国内部の階級関係の実態について、正確な知識をもたなければならない。変革は、盤の上で勝手に将棋の駒を動かしたり、頭の中で筋書をつくったりすることとは、まったく無縁である。与えられた実際の階級関係の中で、与えられた階級関係についてだ

け、問題が提起され、解決されなければならない。では、『構造改革論』は、資本主義国内部の階級関係をどのようにとらえているかといえば、右のきまり文句から明らかなように、一方の側にある『ひとにぎりの独占体』と他方の側にある『広汎な労働者階級と勤労大衆』との、二つの階級勢力、いわば二大階級しか出てこない。つまり、『構造改革論』者は、独占資本主義国の内部に、階級としては、『ひとにぎりの独占体』と『広汎な労働者階級と勤労大衆』との二つしか認めないのである」（三〇一ページ）。

そして、右のような独特な「発想法」について、わたしは、

「ごらんのように、『構造改革論』者は、独占資本主義国内部の基本的な階級構造すら、ほとんどつかんでいない。その複雑な階級構成、その錯綜した相互関係はみななくなって、たった二つの、悪玉と善玉との、仇役と主役との単純自明な関係だけがある。このような観念が、どんなに現実ばなれした非科学的なものかは、現実の独占資本主義社会の簡単な事実とくらべれば、明白である。」（三〇三ページ、傍点―原文のまま）

と述べ、つづいて行をあらためて、

「まず、階級構成についてみよう。」

という文章をもって、五行から成る一文節（パラグラフ）、すなわち、「階級構成」のあらましを説明している一文節（パラグラフ）をかかげ、つぎに、「その錯綜した相互関係」について二つの文節（パラグラフ）をもうけて説明し、ついでさらにたちいって、「中間階層」および「労働者階級」についてとくに一節――「3」――をあてて重要な考察をおこなっている。これによって、「基本的な階級構成と各階層の根本的性格、それらの相互関係」はほぼ明らかにされているのであるが、なお、これらの「相互関係」を規制するものとして「上部構造」とりわけイデオロギーの問題をとりあげることが不可欠の要件となるのであって、このためにわたしは、右につづく「4」においてこの点の究明をこころみているのであって、以上「階級関係」にかんするすべての説明をしめくくるものとして、最後に「5」において簡単な総括を与えるという

ことにしているのである。

それゆえ、「階級構成」にかんする拙著の以上のような説明の展開をここに引用してかかげるさいには、読者がその内容をより容易に理解することができるように、また行論で再度引用するさいの便宜のために、各節各文章の排列は原文どおりとし、ただ原文の節の区分――「2」、「3」、「4」および「5」――をやめそのかわりに㈠、㈡と番号をつけ、説明の順序にしたがい、はじめから、㈠階級構成について、㈡諸階層のあいだの相互関係、㈢「中間階層」について、㈣賃銀労働者階級について、㈤「上部構造」その他の問題、㈥以上の総括、というように見出しをつけ区切ってかかげることにした。「階級構成」のとらえ方は、変革路線を考えるばあいの最も重要な根本問題であり、榊氏の思考方法を評価するさいの決定的な基準をも提供するものであるので、あえて長文の引用をしたわけである。

三

㈠ 階級構成について

「独占資本主義社会はごく大まかにいって、(1)独占資本家階層のほかに、(2)独占外の中小資本家階層、(3)小資本家兼独立生産者の階層、(4)独立生産者階層、(5)独立生産者兼賃銀労働者の階層、(6)賃銀労働者階級、から成り立っている。（主として(1)と(2)とをあわせて「資本家階級」、(3)と(4)と(5)とをあわせて「中間階層」、主として(4)と(5)と(6)とをあわせて「勤労大衆」と呼ぶことができる。）『構造改革論』者は、第一に、(2)と(3)の階層を見落している。これは、第一の欠陥である」（三〇三ページ）。

㈡ 諸階層のあいだの相互関係

「つぎに、右の六つに分けられた諸階層のあいだの相互関係ということになると、簡単ではない。まず、(1)から(5)までは、いずれも『私的所有者』であり、『私的所有者』としての一定の、共通な性格をもっている。そのうち、(1)から(3)までは、『資本制的

私的所有者』つまり『資本家』であり、資本家としての一定の、共通な性格をもっている。ということは、独占資本家階層は、『私的所有者』として、(2)から(5)にいたるまでの階層全体と同じ性格をもっており、そのかぎりで共通の意識と性向とをもっているということであり、逆にいえば、(1)は、(2)から(5)までの広汎な階層をひとつの『地盤』としているということ、総じて、『私的所有』がそのもっとも基抵的な『土台』となっているということである。さらに、(1)独占資本家階層は、(2)、(3)の諸階層と同じ『資本家』としての性格をもち、その面で共通の意識と性向とをもっており、逆にいえば、(2)と(3)をその直接的「地盤」とし、『資本制的所有』を共通の『土台』としている。ところが、賃銀労働者階級は、いうまでもなく『所有』とは無縁の、無産のプロレタリアートであり、その点で『私的所有者』とは共通なものをまったくもたず、[34] しかも『資本制的私的所有』によって直接に搾取されるもの、これと対立しているものである。『ひとにぎりの独占体』などという言葉が示しているのは、この『私的所有』および『資本制的私的所有』という、重大な意義をもつ共通の『地盤』をまったく見ていないということである。これは、『構造改革論』者の、第二の欠陥である。

(34) 賃銀労働者は、階級としてはまさに無所有・無産のプロレタリアであるが、しかし、個人的にはかならずしも無所有とはいえない者がすくなからずある。大衆投資家の中には、労働者、サラリーマンの小株主が相当数ある。これらの賃銀労働者の意識がプロレタリア的でなく、小ブル的であるのは当然である。

ところで、さきにあげた六つの階層に属する者は、それぞれその地位にとどまっていて、同じ状態をつづけられるというものでは、けっしてない。資本主義社会ではつねに生死をかけた生存競争がおこなわれ、少数の経済的優位にあるものが勝ちのこり、多数の劣位にあるものは没落する。それぞれの階層を構成する要素は、ふだんに流動し、一部少数の者は上位の階層にうつるが、多数の者はつねに下位に落ちこむ危険にさらされており、事実また落ちこみつつある。(1)から(3)までの『私的所有者階層』は、この競争の中で、経済的利益のために、必死のたたかいをする。かれらは、その経済的地位を守るために、たえず上位の階層に入ることをよぎなくされるし、また入ることをねがわざるをえない。かれらの地位を守るためには、経済的な力が必要である。ところが、この経済的な力を最高度に集中し自由にしているのは、まさに独占資本家階層である。とくに(2)の大半と(3)の一部は、『資本家』としての地位を守るためには、(1)に依存せざるをえない。独占資本に従属し、これとの結びつきにおいて自己の地位を維持することをよぎなくされている中小資本家の大群と、同じく大量の独立生産者、――これらは、まさに独占ブルジョアジーに敵対するものではなくして、その味方であり、部下である。銀行その他を通じての『抱きこみ』など持ちだすまでもない。たとえば、独

占資本の支配する大企業に従属する下請工場のおびただしい系列、その系列のもとに組み入れられている中小企業主の大群と、同じくその中小企業で働いている賃銀労働者の膨大な数とを思い浮べてみるがいい。現実に『ひとにぎりの独占体』が(2)から(6)にいたるまでの各階層の構成部分の相当数をその支配下にしっかりととらえ、これを自己の支性としているということは、まぎれもない事実であり、これこそは、独占資本主義社会の法則的現象のひとつである。この法則的事実を完全に見落していること、――これは、『構造改革論』者の第三の、重大な欠陥である」（三〇三―三〇四ページ、傍点―あらたにつけたもの）。

(三) 「中間階層」について

『中間階層』は、別の表現をつかえば、小所有者、小経営主ということができる。この階層について、第一に注意すべきは、それがどの資本主義国でも、総人口のうちきわめて広汎な部分を占めているということである。かれらは、経済的な生存競争の中で私的所有者としてもっとも不利な条件のもとにおかれ、その経済的地位はきわめて不安定であるが、そうであればあるほど『私的所有者』としての地位にしがみつくことになるし、『私的所有者』としては、より保証された・より恵まれた・より安泰な『私的所有者』、『より富んだ私的所有者』、つまり一人前の『資本家』になることが切実な目的となる。ここからしても、かれらの意識水準、意識内容が、ほとんど資本家のそれと同じになり、習慣・伝統の根強いはたらきも手伝って、ブルジョア的観念にすっかりとらわれてしまうのは、明白である。うまく『資本家』に出世するものはごく少なく、また『小資本家』に成り上ったとしても、けっしてその地位は安定しない。大多数のものは、経済的地位の悪化、零落の危険にいつでもさらされ、多かれ少なかれ賃労働にたよらざるをえなくなる。このようにして半プロレタリアになったばあいにも、そのブルジョア的観念、ブルジョア的意識はたやすくはなくならないし、プロレタリアートの階級意識を身につけることは、しごくむずかしい。かれらは、その経済的地位に制約されて、当然に、プロレタリアートの忍耐、組織性、規律、強固さをひどく欠いていて、ブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだをあちこち動揺し、ときとして極端な革命性を発揮するかと思えば、また、ちょっとした混乱や失敗にぶつかってすぐさま意気沮喪し、ブルジョアジーに屈伏し、反革命陣営にはしる。こうしたことは、すでに科学的経済理論にもとづいて明確にされている法則的傾向である。

独占資本主義のもとでは、これらの小所有者、小経営主の経済的地位はずっと不安定になり、独占資本による収奪・搾取はずっとはげしいが、そのために、右の小ブルジョア的革命性[35]、無規律性、動揺性は、なおいっそう強められる。プロレタリア的意識を

もち確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつものは、そのうちのごく少数のもの、その最下層のうちの一部のものだけである。しかも、その最下層の一部のものがそうして革命勢力の一部隊となるためには、そのまえにプロレタリアート、とくにその前衛の側からかれらにたいして長期間、継続的に粘りづよく適切かつ強力な指導がなされ、そして長期にわたる苦しい闘争とたびかさなる失敗の経験をなめることが必要である。

(35) 国家独占資本主義のもとで強化された独占資本の支配体制を前にして、この小ブルジョア的革命性は、動揺をくりかえし、その敗北感を幻想によって救いあげなければならない破目におちいるのがつねである。ファシズムの支柱のひとつもここに見出される。右の、救いとしての幻想の産物と見なされているのが、まさに『構造改革論』なのである。

右の法則的事実を完全に見落して、十把ひとからげに『広汎な勤労大衆』という名目のもとに、『ただちに反独占統一戦線を結成すべき本部隊』だとして中間階層をとらえているのは、まったくわらうべき錯誤といわなければならない。これは、『構造改革論』者の第四の、重大な欠陥である」（三〇五―三〇七ページ、傍点―あらたにつけたもの）。

㈣　賃銀労働者階級について

「では、革命の主体的勢力である(6)の賃銀労働者階級は、どうか？　『労働者階級は無産のプロレタリアートである。だから、それは当然にひとりのこらず階級意識を身につけ、階級的組織をつくりあげ、階級闘争に挺身するものだし、すぐさま反独占統一戦線に結集し、その中核として奮闘するものだ』、――こういう考え方は、知らないうちにわれわれの大部分の者の頭の中に入ってきており、『構造改革論』も、もちろん、この考え方のうえに立っている。だが、はたしてそのとおりであるか？　残念ながら、事実はことほどさように簡単ではないのである。

賃銀労働者は、生れながらにして階級意識をもつものではけっしてない。また、賃銀労働者として生活し日常闘争をくりかえしているからといって、階級意識がひとりでに身についてくるものでもない。賃銀労働者が生れながらにもっているのは、むしろ小ブルジョア的意識である。かれらの生活は小ブルジョアのそれと大差ない。生活が苦しければ苦しいほど、かれはかれ個人の私的利益を守らなければならないし、かれ個人の私的利益を第一に考えねばならないから、その小ブルジョア的意識はますます根強いものになる。たとえ、組合をつくり、日常闘争をくりかえしたとしても、それは狭い企業別組合の中でのこと、闘争は狭い範囲の組合内労働者の利害だけに結びつき、とうてい全労働者の利害に結びつくようなものとはならない。組織が発展して産業別組合に

なればかなりの前進であるが、しかしそれでも階級意識は十分とはいえない。賃銀労働者が資本主義の墓掘人としてのプロレタリアートの歴史的使命をはっきりとつかみ、その使命をはたす力を自覚し、そのための組織をうちたてたときに、はじめてかれは階級意識をしっかりと身につけたことになる。だが、このプロレタリアートの歴史的使命は、資本主義社会の発展法則、資本主義社会の中でのプロレタリアートの地位を明確に認識しなければ、とうてい理解されない。これらの認識は、いったい、どこから得られるか？　それは、かれらの外部から、科学的経済理論と革命理論をうちたてた革命的インテリゲンチャによって、またこれらのものを真に身につけたプロレタリアートの先進的部隊によって、もちこまれる。それも、たんにもちこまれるだけでは、だめである。賃銀労働者が長いこと苦しい生活と闘争とを体験し、その間先進的部隊から正しい適切な指導をうけ、困難にも屈せず粘りづよく真剣な学習をつづけることによって、―それもくりかえし失敗と誤ちをおかしたあげくに、―はじめてしっかりと身につけることができるのである。

ところが、賃銀労働者は広汎な小ブルジョアの大衆でとりかこまれ、小ブルジョアの中からたえず賃銀労働者階級が補充される。そのため、プロレタリアートの中に小ブルジョア的意識と観念がいつももちこまれ、階級意識をむしばみ、多くの無自覚なプロレタリアを生みだす。労働組合をとってみても、階級意識のしっかりしたものばかりとはかぎらない。どの独占資本主義国でも、労資協調をうたった御用組合は山ほどあり、これをひきまわすいわゆる労働貴族は掃いて捨てるほどいる。[36] これらのものは、階級意識をもちこむどころか、これを曖昧にし、骨抜きにすることをその第一の仕事としているのである。

(36) この『労働運動におけるブルジョアジーの真の代理人、資本家階級の労働者手代』が独占資本主義の段階で必然的に重大な社会的役割をはたすものだということ――これを明確にすることが、まさにレーニンの『帝国主義論』の基本的課題のひとつであったのである。ところが、なんと独占資本主義のもとで革命路線を論じている『構造改革論』者の眼には、この重大な法則的事実は全然うつらないのである。

それゆえ、**右のような賃銀労働者階級の意識と組織との実態を正確につかみ、どのようにして階級意識を身につけさせ、革命的組織に結集させ、真に主体的勢力の名に値するものにつくりあげ、その歴史的使命をなしとげるものにもっていくかということこそ、最重要な問題であり、真の革命的理論家に課せられた基本的な課題なのである。**右のようなプロレタリアートの実態と、これに関連した右の決定的な課題と、そのいずれをも完全に見落していること、――これが、『構造改革論』者の第五の、重大な欠陥である」（三〇七―三〇九ページ、傍点―原文のまま）。

㈤　「上部構造」その他の問題

「さて、基本的な階級構成と各階層の根本的性格、それらの相互関係のあらましは以上のとおりであるが、ここで当然問題とならねばならぬのは、『ひとにぎりの独占体』による『広汎な労働者階級と勤労大衆』の搾取・抑圧というはっきりした事実がありながら、後者の生活がひどく窮迫しているという事実がありながら、なぜ、いぜんとしてこれらの事実がそのままつづいているのか、なぜ、いまもって『広汎な反独占統一戦線』ができあがらないのか、ということである。これにたいするひとつの答は、各階層の性格とそれらの相互関係にかんするさきの説明の中に見いだされる。だが、そのほかにつぎの事実がぜひとも考慮に入れられねばならない。

それは、第一には、右の搾取・抑圧という根本的な関係が隠蔽され、ごまかされて、『広汎な勤労大衆』にほとんど認識されないということである。この隠蔽、ごまかしにあずかつて力があるのは、つぎの一連の事実である。それは、私的所有にもとづく商品生産社会では、ブルジョア的な観念、習慣、伝統が支配していて、むしろたえず強められていること、階級意識を鈍化させ自分たちの投票用家畜にするための教育を支配階級が積極的におしすすめていること、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、映画等から見世物野球、やくざ調歌謡曲にいたるまでたいていのものがブルジョア的観念を強め、資本主義社会の永遠性、階級調和をふきこむ宣伝をたえずおこなつてこれがひとりでに勤労者の頭にしみこんでいること、とくに国家機構が独占に代位して種々の『社会的機能』をはたし、これが搾取・抑圧を眼に見えないものにしていること、である。『出版・集会・結社の自由』とか『普通選挙権』といったような、『民主主義』的諸制度も、右の隠蔽、ごまかしに重要な役割をはたしている。

要するに、経済的な側面についてばかりでなく、政治、社会、イデオロギー等すべての分野においてどのように搾取・抑圧の隠蔽と強化とがおこなわれているかを実際に把握することが決定的に重要である。これらの重要な問題を完全に忘れはてていること、――これが、『精造改革論』者の第六の、重大な欠陥である」（三〇九―三一〇ページ、傍点―あらたにつけたもの）。

㈥　以上の総括

「以上検討したところをとりまとめてみれば、『構造改革論』の独特の思考方法の根底にあるものは、プロレタリアートの歴史的役割についての理解の欠如、あるいはその役割の否定ということになるであろう。**なぜ、プロレタリアートだけが資本主義の墓掘人となりうるし、またならねばならぬか**ということ、――これが変革の路線を考えるばあいに第一にはつきり把握されていなけ

ればならないことである。そのためには、当然にプロレタリアートと他の諸階層との相互関係も正確にとらえられていなければならない。そして、これらの把握はすべて、資本主義社会の発展法則を明らかにした科学的経済理論を十分正しく理解したときにだけ、はじめて可能となるのである。

プロレタリアートの歴史的使命ということの意義をその十分な広がりと深さとにおいてとらえなければ、その階級意識や革命的組織の問題、そしてまた、中間階層たる『広汎な勤労大衆』にたいする政治的指導の問題も、正しく提起されることができず、したがって当然に正しく解決されえないのである。

プロレタリアートの歴史的役割についての理解の欠如は、かならず、つぎの根本的な問題についての完全な無関心、いいかえれば反革命的傍観者の立場への転落に結びついている。その根本的な問題とは、どのようにして現実にプロレタリアートを墓掘人にするか、どのようにして実際に革命の主体的勢力につくりあげその歴史的使命をはたさせるか、ということである。これは、プロレタリアートの先進部隊は、その前衛として、プロレタリアートをどのようにして主体的勢力につくりあげるか、また主体的勢力としてプロレタリアートは、どのように半プロレタリア、小ブルジョア、つまり広汎な勤労大衆を味方にひきつけ、動員して、敵勢力を打ちたおすかという、革命の主体的指導の問題である……。

ところで、革命の主体的指導という問題を考えるばあいに、第一に必要なことは、――右にみたように――その資本主義国内部のすべての階級勢力とその相互関係を、厳密に、客観的に考慮に入れ、評価するということであるが、しかしこれだけでは、まだ十分とはいえない。第二には、その国をとりまく諸国家の階級勢力とそれの当該国内の階級勢力との相互関係が、同じく厳密に、客観的に考慮に入れられねばならない。この第二のことは、独占資本主義の段階、とくに第二次大戦後の国家独占資本主義の段階においては、決定的に重要である。こんにち世界の資本主義国で、アメリカ独占資本と緊密な関係をもたない国はなく、またその帝国主義的支配の網の目の中に多かれ少なかれ包みこまれていない国はない。外国の強大な独占資本による帝国主義的支配という事実を冷静に、厳密に、客観的に評価しないでは、現段階における主体的指導はおよそ問題にならない。(38)

(38) 国家権力の本質については、『公共的機能』などという言葉でいいくるめることもできようが、この帝国主義的支配の実態は、どんな詭弁でもごまかしきれない。『構造改革論』者がこの支配の実態について全然ふれることをしないという事実は、――注(36)で指摘した労働貴族の見落しとならんで――じつに特徴的である。

右の帝国主義的支配という決定的な要素と関連して、きわめて教訓的なのは、アメリカの中心的な労働組合であるＡＦＬと

ＣＩＯがアメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争を支持する声明を発表したということ、そしてまた、イギリスの労働組合会議（ＴＵＣ）がアフリカ人労働運動の発展をおさえ、イギリス軍隊によるストライキ弾圧を黙認し、民族解放運動の阻止に一役買っているという事実である。ＡＦＬとＣＩＯは国務省に協力し、ＴＵＣは植民地省に同調する。もっとも中心的な労働組合組織が、数億の勤労人民の強力による抑圧・収奪・殺戮に狂奔しつつある帝国主義者の血まみれの汚れきった手に接吻している。帝国主義の基本的法則＝最大限利潤の法則の貫徹の、なんときびしく、頑強であることか！

以上、当該国とこれをとりまく諸国家とのすべての階級勢力とそれらの相互関係を客観的に評価したうえで、さらにぜひとも考慮に入れなければならないのは、他の国々の革命運動の経験であり、とくにその評価と摂取の問題である」（三一〇―三一三ページ、ゴシック体――原文のまま、傍点――あらたにつけたもの）。

なお、この最後に指摘されている「他の国々の革命運動の経験、とくにその評価と摂取の問題」については、第四章の中の右につづく「6」で、「構造改革論」者がおちいっている根本的誤謬――「他の国の党の唱える観念的な理論」の主観的な「評価」と御都合主義的な「摂取」――をあきらかにしているのであるが、とくにその「摂取」の問題についての説明は、当面榊氏の攻撃論文のあり方を吟味する上で重要な参考資料となるものと考えられるので、その箇所を――その中に附けられた注（39）をふくめて――つぎにかかげておくことにしよう。

「……つぎに『摂取』については、なおさら問題をふくんでいる。それは、たとえ『イタリーの道』つまり『構造的改良』論が、理窟の上で一応正しいとしても、これはイタリー資本主義という特殊な歴史的条件とかたく結びついているものである。これを諸条件のひじょうにちがった日本資本主義にそのままあてはめ『摂取』するのは、まったく見当ちがいの軽はずみ、非科学的な暴挙といわざるをえない。このことは、とくに当面問題となっている『民主主義』についての両資本主義の差異をちょっと見てみるだけで明白である。イタリーではファシスト支配者にたいする民主的勢力の武装反抗がおしすすめられ、ついにこれを打ちたおして民主的権力を獲得するまでになったが、日本では、軍部・ファシスト支配者にたいする重大な反抗はまったくといっていいほどおこらず、敗戦によって支配者の権力が崩壊しかかっているときにさえも権力をめざす民主的勢力の闘争はついぞあらわれず、

外国進駐軍によってようやく『民主主義』を与えられた始末である。『広汎な勤労大衆』の意識水準にしても、かしこでは『民主主義』的意識が相当に浸透しているとみられるが、ここでは、『民主主義』的意識どころか、前期的意識が[39]びまんし、支配している。かしこでは『社会主義』とか『変革』とかが一応『広汎な勤労大衆』の口にのぼり、ある程度意味をもちはじめているが、ここでは、この二つの言葉について考えることはおろか、これらの言葉をきいただけで毛嫌いする『広汎な勤労大衆』が多勢いるのである。このような『民主主義』の未熟、幼稚、低劣という条件のもとにあるこの国に、実証されもしない――むしろ誤れるものとして歴史により烙印をおされつつある――机上のプランをそのままもちこもうとしていること、――これこそ、『構造改革論』者の第七の、重大な欠陥といわなければならない。

(39) このことは、日本のすぐれた勤労人民二百五十万を殺した侵略戦争の最高責任者、前期的制度と前期的観念の中核的象徴である天皇について、『勤労大衆』のおどろくほどおくれた意識と観念がどれだけびまんしているかをみればよくわかる。日本を『震憾』させたかに見えた安保大闘争直後の国会選挙において、進歩的陣営がアメリカ帝国主義の尻尾＝保守反動陣営に惨敗したという厳然たる事実も、これを裏書きしているもののひとつである」（三一四―三一五ページ、傍点―原文のまま）。

さて、拙著『構造改革論批判』の結びの第四章「総括」の内容はあらまし以上のとおりである。では、この内容を読んだうえで、榊氏がこれをどのようにとらえ、読者に紹介し、そして批判していられるかということを、事実によって正確に知るために、榊氏の攻撃論文の中から該当箇所をあますところなく、つぎに掲載することにしよう。。

「四、独占資本を『強め』、労働者階級を『弱める』

わが国の『構造改革』論者が『ひとにぎりの独占体』という口実で『なしくずし革命』論を説いてきたことに関連して、山本氏は『批判』をこころみている。そのばあいの論点とは、だいたいつぎのようなものである。

独占資本主義社会には大まかにいって六つの階級・階層構成がある。①独占資本家階級②独占外の中小資本家階層③小資本家兼独立生産者の階層④独立生産者階層⑤独立生産者兼賃銀労働者の階層⑥賃銀労働者階級。ところが『構造改革論』者がこの②と③を見落しているのが第一の欠陥である。第二の欠陥は①から⑤までの広汎な層が『私的所有』という基底的な土台をもっているのをまったく見ないところにある。つまり、⑥の賃銀労働者以外は『私有者』だということを見ないのが誤りだ。第三の欠陥は、②

の大半と③の一部は独占資本の味方であり、部下であり、さらに独占体は②から⑥までの各階層の相当数を支配下にしっかととらえて支柱としているのを見落していることである。

ごらんのように、山本氏の『批判』の骨格は、独占体は『ひとにぎり』ではなくて強大なものであり、賃銀労働者階級は①から⑤までの私的所有者と対立しているという点にある。そのうえ、山本氏によれば、賃銀労働者も『階級としてはまさに無所有・無産のプロレタリアであるが、しかし個人的にはかならずしも無所有とはいえない者がすくなからずある。大衆投資家の中には、労働者、サラリーマンの小株主が相当数ある』というのであるから、賃銀労働者階級の勢力はいっそう小さなものになる。ここから山本氏は、『構造改革』論者は独占資本の力を過小評価して革命を甘くみている、　といった式の『批判』をしていくのであるが、山本氏の意図はどうであれ、この種の『批判』では『構造改革』論を論破することはできない。なぜなら、『構造改革』論は、独占体と独占資本主義の過小評価に根をもつのではなくて、独占資本主義に変質を見出し、それを促進（改良）することによって、革命なしになしくずし的に社会主義的諸関係が誕生するかのように見なすところに最大の特徴があるからである。

ところが山本氏は、問題の所在をすりかえて、独占体と労働者階級の力関係（それも純経済的な）がどうかということをとりだし、一方の力を最大限に『強め』て描き、他方の力を最小限に『切りちじめ』『弱め』て描き出すことによって、『構造改革』論を批判したつもりになっている。その結果はどうか。労働者階級は、生産と生産関係のなかで占めるその地位からではなくて、モノやカネを持っているかどうかによって計られ、なにも持たないものだけが純粋労働者階級だという『理論』にまで〝昇華〟されてしまっている。労働者でもいくらか株券をもてば、その『意識はプロレタリア的でなく、小ブル的』であるとされる。今日の資本主義社会では、無理に社債や社内預金をさせられている労働者が大量にのぼっているのが現実であるが、この山本説によれば、これらはすべて『小ブル的』な意識のもち主であり、したがって、資本家が社債や社内預金をさせればさせるほど〝純粋〟労働者は少なくなり、革命は遠のいていく、ということになる。独占資本家の期待どおりの結末である。

五、セクト主義の主張

だが、マルクス・レーニン主義の階級区分が、そのような現象的な手法を拒否するのはもちろんである。労働者階級とはモノやカネを持っているかどうかで規定されるのではなくて、生産と生産関係の中での地位（なによりも、**生産手段**を所有していないがゆえに労働力を売って労働するという地位）から規定されるものであり、この地位がモノやカネを持てないという現象を規定するのである。ついでにふれると、『共産党宣言』のなかに、プロレタリアートは『鉄鎖以外に失うべき何物もない』という有名なこ

とばがあるが、これは革命で失うものは『鉄鎖のみ』であるということであって、労働者は無一物であるということではない。

山本説にしたがっていけば、労働者は無一物になっていけばいくほど『革命的』になり、賃上げ闘争をやればやるほど『小ブル的』になるということにさえなろう。それは、例の教条主義的『窮乏待望論』の再版であろう。だが、実際には、社債や社内預金をいくらかもっていても労働者は労働者であり、それで労働者が小ブル化して社会変革に背を向けることに必ずなるわけでもない。資本主義的生産関係は、それほど『甘い』ものではない。労働者階級の基本的な地位が、経済的・社会的諸矛盾によって、また前衛党の活動によって、かれを社会変革の方向に前進させていくのである。

労働者階級だけでなく、山本氏が独占体の『支柱』としてえがく中間的諸階層までもが、独占体の圧迫と収奪に反抗する側面をもっている。山本氏は、所有関係が独占資本主義の諸関係の中に組みこまれているということから、『ごく少数のもの、その最下層のうち一部のものだけ』をのぞいて他のすべてを否定的にのみ見ている。しかし、これは民主商工会の活動を見てもわかるように、事態の発展とはかなりちがっているばかりか、それは、反帝反独占の民主主義革命の段階における政治路線との関連では統一戦線の可能性の封殺というまごうことなきセクト主義とならないわけにいかないだろう」（ゴシック体―榊氏のもの、傍点―山本）。

四

さて、ここにかかげた拙著の結章「総括」のあらすじと、これをとりあげ批判を加えている榊氏の文章とを、どうかとくと読みくらべていただきたいものである。

両者を、その文面だけ照らし合せてみるだけで、榊氏の批判の精神がどのようなものであるかは、すぐさまはっきりするであろう。榊氏が、はじめから、拙著の内容を全体にわたって吟味しようとは考えず、その説明の最初の一部分しか眼を通すという労をとっておられないこと、しかも、そのほんの一部分を読むさいにも、そこに書かれている文字をただしく読みとることなどまったく心がけず、御自分の都合のよいようにゆがめ、曲げて解釈し、また肝腎の

言葉はぬかして飛び飛びに言葉を拾うということをして、なんとしてでもこれをやっつけようと努めていられること――こうしたことが実によく示されている。それと同時に、拙著結章の「総括」に述べられているきわめて重要な諸問題について、わたしの説明をやっつけるためには、いきおい、榊氏自身の考え方を述べざるをえないのであって、氏の文章の中には、これらの問題についての氏の特異な理解の仕方、きわめて注目すべき思考方法がすっかり明示されているという「結果」にもなっている。そこで、以下において、両者の比較、検討から出てくる大切な論点を考察してみることにしよう。

まず第一にとりあげねばならないのは、いうまでもなく、「階級構成」の問題である。さきの「㈥以上の総括」の後半で明示してあるように、「革命の主体的指導という問題を考えるばあいに、第一に必要なことは、その資本主義国内部のすべての階級勢力とその相互関係を、厳密に、客観的に考慮に入れ、評価するということである」というのが、「階級構成」をとらえるばあいのわたしの基本的視点である。これにたいして、「構造改革論」者は、独占体は「ひとにぎり」で「労働者階級と勤労大衆」は圧倒的多数の「広汎」だから、「広汎な労働者階級と勤労大衆」がたやすく「反独占統一戦線」を結成して「ひとにぎりの独占体」を孤立させ、これを追いつめ、平和的・民主的に変革を遂行できるのだという「思考方法ないしは発想法」を、基本としている。そこで、わたしは、かれらが「独占資本主義国内部の基本的な階級構造」すらもつかんでいないし、その複雑な階級構成、その錯綜した相互関係を厳密にとらえなければとうてい問題にならないと述べて、まず基本的な「階級構成」のあらましを示し、ついでその相互関係の基本的なありかたについて説明を与えているのである。

榊氏は、「構造改革論」者と山本との双方の主張を根本的に批判し一掃されようというのであるから、「階級構成」

のとらえ方についても、当然、明確な批判が下されなければならない。いったい、「構造改革論」者の「ひとにぎりの独占体に対する広汎な労働者階級と勤労大衆」というとらえ方は正しいのか誤りか、また、山本のかかげる(1)から(6)までの「階級構成」は正しいのか誤りか？　もし、両者とも誤りであるというのであれば、いったい、榊氏が正しいとされる階級構成はどのようなものであるのか？――こういう当然の問いにたいして、榊氏は、なんと驚いたことに、ひとつも答えを出しておられないのである。簡単にいえば、頬っかむりでおし通そうというわけである。右の当然の問いになにひとつ答えないで、両者とも誤りだなどと、よくもまあ「批判」できたものである。

ところで、先きにいって「五」のはじめでようやく榊氏は、わたしの「階級構成」のとらえ方について、

「だが、マルクス・レーニン主義の階級区分がそのような現象的な手法を拒否するのはもちろんである。」

と述べたてておられる。つまり、「階級構成」の問題が一応片づいてしまったところで、にわかに山本の「階級区分」は「現象的な手法」だと非難をぶつけておられるのである。この、「手法」という言葉に「現象的な」という形容詞をつけてつくりあげた奇妙な言葉が、いったい、どうして考え出されたか、その意味するところはどういうことかということについては、まもなく明らかにされるはずであるが、この辺のところにも、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」が実によく示されているのである。だが、わたしの「階級区分」を「現象的な手法」だとやっつけられるからには、榊君よ、どうか、「わが国のマルクス・レーニン主義者」らしく、君自身の「現象的な手法」でない「階級区分」をはっきりと示したまえ。自分自身の「階級区分」はひとつも示さず、また示すこともできず、他人の「階級区分」について「現象的な手法」などという、迷文句でやっつけてしまおうなどと考えるとは、なんと見下げはてた「わが国のマルクス・レーニン主義者」であることか！

榊氏は、その「四」のはじめで「階級構成」をとりあげるときには、「現象的な手法」などという言葉はおくびにも出さず、わたしの示した「階級区分」をそのままとりいれていたものである。ということは、そのときには榊氏にとって、わたしがなぜ、どういう基準によって、右のような「階級構成」を示しているかということが、全然わけわからなかった、ということである。そして、「階級区分」の正しい基準、とくにマルクス・レーニン主義的区分の基準というものは、榊氏には、最後までわからずじまいとなっているのである。このわからずじまいという事実をはっきり示しているのが、氏自身再三用いられる独特の用語――「生産と生産関係のなかで占める地位」――である。この用語の示している客観的意義については、あとでよく吟味することにしよう。

では、なぜ、榊氏は、はじめにはわたしの「階級構成」をそのまま受けいれておきながら、あとになってわたしの「階級区分」の仕方が「現象的な手法」だなどという非難をなげつけるようになったのであろうか？　それはおそらくつぎのような事情によるものと推察される。榊氏は、はじめわたしの「階級構成」の説明をとりあげるときには、わたしがなにを「階級区分」の基準にしているかがわけわからなかっただけでなく、これをやっつけようにも、その内容が「マルクス・レーニン主義」的見地からみて正しいものとひじょうによく似ているように感じられたので、うかつにはこれに手を出さないほうが賢明と判断されたにちがいない。だが、そのすぐあとで、榊氏は、わたしの説明の中に「無所有」という文字が出てくるのを発見して、しめたと思われたのである。「無所有」とあるからには、これは「モノやカネをもっていない」ことにちがいない。山本は「モノやカネを持っているかどうか」によって「計って」いる、だから山本はあわれにも「現象的な手法」におちこんでいるのだ、ときめこんだという次第である。

経済学の素養のないふつうの人間は、この「無所有」という言葉については、当然、俗物的解釈以上に出ることは

できないのであって、これを国語的に言いなおして「モノやカネを持っていない」ことだと考える。榊氏も、もちろん、この俗物的・国語的解釈をそのままうのみにし、この解釈を唯一の拠りどころとして、つぎのような非難攻撃をあびせる、――山本は、「労働者階級」をば「モノやカネを持っていないということで計っている」、「なにも持たないものだけが純粋労働者階級だという『理論』まで述べたてているが、このように「モノやカネを持っていない」ことを基準にして「純粋労働者」を区分しているために、山本は、すこしでも「モノやカネを持っている」者はすべて「労働者階級」から除外してしまい。そのために「賃銀労働者階級の勢力をいっそう小さいものにし」、その「力を最小限に『切りちじめ』『弱め』て描き出す」という、許しがたい誤謬とセクト主義的偏向を犯しているものである、と。

それゆえ、榊氏の論文の「四」が、「独占資本を『強め』、労働者階級を『弱める』」という、まことに奇妙な題をつけられているのも、右のような、「無所有」についての榊氏自身の俗物的・国語的解釈をもととしての、わたしへの非難と攻撃を表示したものなのである。わたしの「構造改革論」批判が的外れだという榊氏の非難も、この「無所有」についての榊氏自身の解釈が基本になっている。つまり、「無所有」を「モノやカネをもっていない」ことだとする俗物的解釈の上にはじめて、榊氏のこれらいっさいの非難攻撃が成り立っているのである。だが、はたして真のマルクス・レーニン主義の見地からみて、このような解釈が許されるものかどうか？　わたしは、この「無所有」の内容を、それが科学的経済理論においてしめる意味を、はっきりさせることがぜひとも必要だとおもう。わたしの「階級区分」が誤りかどうか、榊氏の批判がマルクス・レーニン主義の基盤の上に立っているかどうかということは、これによってたちどころにあきらかとなるはずである。

五

まずはじめに、榊氏自身の解釈される「無所有」という言葉が、どういう事実をあらわすことになるかを、考えてみよう。榊氏は、「無所有」とは「モノやカネをもっていない」ことだと理解されている。なるほど、言葉そのものとしては、そういう解釈も一応成り立ちうる。だが、こういう言葉、つまり概念は、ただその言葉だけが在って、事実とはなんら関係のないものだといってすますことはけっしてできない。榊氏は、「唯物論研究会々員」でいられるそうである。では、「無所有」つまり「モノやカネをもっていない」という言葉がどのような事実を指して言ったものかは、よく御存じのはずである。榊君よ、どうかはっきりと、「無所有」＝「モノやカネをもっていない」という言葉がどんな事実を指して言ったものかを、答えてくれたまえ。

「わが国のマルクス・レーニン主義者」をもって自任される榊氏にはたいへんお気の毒なことであるが、「無所有」という言葉は、榊氏のように国語的・俗物的に解釈するときには、事実ありえないもの、無意味なものになってしまうのである。考えてもみたまえ、この世に生存している人で「モノやカネをもっていない」者が、ひとりでもあるだろうか？　「モノもなくカネもなし」では、ひとは一週間とは生きられない。衣服を見たまえ、これはりっぱな「モノ」である。履物でも食器でも、多少の家財道具でも、みな「モノ」である。こういう「モノ」をもっていないような労働者が、日本のどこに生きているか？　乞食ですら、若干の衣服、食器、そしてある種の家財道具はちゃんと所持している。人間が生存するためには多少とも生活手段、つまり「モノ」をもっていなければならぬということぐらい、知っていない者がひとりでもあるだろうか？　「カネ」にしても同じである。この資本主義社会では、生活手段

の大半は「カネ」で買わねばならず、必要な時に必要な「モノ」を手に入れるために、ひとはいつでも若干の「カネ」を手許にもっていなければならぬ。だから、人間は、この社会では「モノやカネをもっている」のでなければ、生存できないし、「モノやカネをもっていない」＝「無所有」の人間はひとりもいない、というのが事実なのである。

こうしたことは、科学的経済理論についてすこしでも学んだことのある者ならば、誰でもよく知っていることであり、また科学的経済理論を知らなくても健全な常識の持主であれば、誰でもすぐわかることである。だから、科学的経済理論の研鑽にたずさわっているわたしとしても、当然のことながら、「モノやカネをもっていない」という意味で「無所有」という言葉を使うなどということは、ついぞ考えてみたこともないのである。したがって、榊氏が、この「無所有」という言葉に執着して、ひたすら「モノやカネをもっていない」ことだと力説されているのは、榊氏自身が科学的経済理論を全然学んだことがないことを告白するものであるばかりでなく、さらに、氏自身の使用する特定の言葉についてそれがどんな意味内容のものかを全然考えてみもしないという、特異な「品性」の持主であるということを、如実に示すものとなっている。「無所有」を俗物的思考そのままに、「モノやカネをもっていない」ことだと思いこみ、しかもその俗物的解釈を相手に押しつけておいて、「さてこそ、モノやカネをもっているかどうかで計っている、それは誤りだ、それはとんでもない現象的な手法だ」などとわめきたてるとは、なんと情ない「評論家」であろうか。なんという恥しらずな「マルクス・レーニン主義者」であろうか！

では、わたしは、「階級構成」を説明するさいに、どういう意味で「無所有」という言葉をつかったのか？　いったい、「所有」という概念は、科学的経済理論の立場からみるとき、どういう内容のものとして正確に把握されなければならないか？　お気の毒にも榊氏の理解を絶するこの肝腎の問題について、すこしく説明を加えておこう。

まず、さきにかかげた拙著「総括」の中の「(二)諸階層のあいだの相互関係」の項をごらんいただきたい。読者は、そこに「私的所有」と「資本制的私的所有」という、二つの言葉を見出されるであろう。この、「私的所有」と「資本制的私的所有」という二つの言葉を並べてみただけでも、そのばあいの「所有」が「モノやカネをもっている」ことなど指すものではありえないということを、通常の理解力の持主ならば、察知できるはずである。俗物的思考方法が身にしみつき、その上是が非でも相手をやっつけねばという衝動をおさえきれない手合（テアイ）にとっては、右の二つの言葉の意味を考えてみる力も余裕も、もちろんありえないわけである。榊君よ、よくききたまえ、科学的経済理論の立場からいえば、「所有」という概念は――とくに「階級区分」が問題となっているときには――「生産手段の所有」だけを示すものなのだ。こういう初歩的・基礎的なことを、「わが国のマルクス・レーニン主義者」・「評論家」をもって任ずる榊氏に説明してあげなければならないとは、なんとはづかしいことだろうか。

では、この「生産手段の所有」ということは、どうして「階級区分」において決定的な意義をもつものとなるのか？　それは、「階級」が、まさに「生産における人間の社会的関係」によって規定されるものだからである。生産は、「生きた要因」たる労働力と「死んだ要因」たる生産手段との結合によっておこなわれる。「生産における人間の社会的関係」つまり「生産関係」は、この労働力の担い手たる人間の社会的な関係を基本とするものである。簡単にいえば、労働力の担い手が生産手段の「所有者」であるかどうかということ、もし「所有者」でないならば、その「非労働力」たる「所有者」にたいして「非所有者」たる労働力の担い手が、どういう社会的関係にあるかということ、――これが「生産関係」の基本であり、したがって、これはまた生産手段の「所有関係」という言葉によって表現することができる。「階級区分」にとって「所有」が決定的な意義をもつというのは、まさにこの点を示したもの

なのである。

資本主義社会は、いうまでもなく、資本制的生産関係の支配する社会であって、そこでの基本的な階級関係は、この資本制的生産関係、つまり資本制的私的所有によって規定されている。それは、「非労働力」＝「私的所有者」である資本家の階級と、「非所有者」＝「労働力」である賃銀労働者の階級との階級対立を基本とするものである。だが、この社会には、同じく「私的所有者」であっても、自分自身の労働力を支出して生産手段に働きかける生産者、つまり「私的所有者」＝「労働力」の階層も広汎に存在する。この「私的所有者」＝「労働力」という生産関係は、「本来的私的所有」とも呼ばれるものであって、「資本制的私的所有」つまり「資本制的生産関係」は、この「本来的私的所有」のよりいっそう発展したもの、それの「分解」した形態だと見なされるし、また歴史的にみても事実そのとおりである。それゆえ、資本主義社会の「階級区分」を考えるときには、まず資本家階級と賃銀労働者階級との二大階級と、さらにそれらの中間にある「本来的私的所有」者＝独立生産者の階級とをとりあげなければならない。したがって、基本的な階級は右の三つであるが、なお独立生産者と賃銀労働者との間、および独立生産者と資本家との間に、それぞれ中間的な、過渡的な階層が考えられるし、また事実広汎に存在する。一方では、自身で生産手段を所有し自身の労働力で生産をおこないながら、他方では自身の労働力を商品として売らざるをえない「独立生産者兼賃銀労働者」の階層があると同時に、自身独立生産者でありながら少数の労働者を雇って搾取する「独立生産者兼資本家」の階層があり、さらにまた独占資本主義社会では、資本家階級そのものも、全国民経済を支配する「独占資本家」とそれ以外の「中小資本家」との両階層に分裂せざるをえない。このようにして、独占資本主義社会の「階級構成」を考察するときに、わたしがまず六つの階層を区分しているのは、生産手段と労働力の担い手との社会的な関係、つまり

「所有関係」をこそ基準にしたものであって、このようなことは、マルクス・レーニン主義の見地からみても、およそ基礎的・原則的な事柄でしかないのである。

わたしの挙げた六つの階層の並べ方を見ただけでも右のような「階級区分」の基準は簡単に考えつくはずであるが、科学的経済理論をよく知らず、しかも俗物的解釈で事をすまそうとする「評論家」もあるぐらいだから、なお念のために、わたしの示した「階級構成」について、大切な点を若干補足的に説明しておこう。

第一に注意しなければならないのは、「私的所有」には性質のちがった二つのものがあるということである。「本来的私的所有」者つまり独立生産者は、自身の労働力を働かす対象である個別的生産手段を所有していて、自身労働して生産をおこなうという点では「勤労者」であり、しかも他人の労働力を搾取せず、剰余価値（その転化形態である利潤、利子、配当、地代など）を取得しないという点で「資本家」とは全くちがう。「資本制的私的所有」者＝資本家は、自身労働力の担い手としてはたらかず、他人の労働力を商品として購入しその私有する生産手段に結びつけ、剰余価値（その転化諸形態）を取得する。資本家にとっては、その所有する貨幣は資本としてはたらき、生産手段も労働力（他人の）もみな資本の実存形態にすぎず、価値増殖、不労所得獲得のための手段にすぎない。この「資本制的私的所有」者の生産し搾取した剰余価値は、種々の転化形態（産業利潤、商業利潤、企業者利得、利子、配当、地代等）に分化するが、これらの転化諸形態をば種々の所有名儀によって取得する者は、すべて資本家階級に属するものと見なされる。たとえば、土地、家屋、株式、公社債等を所有して、多かれ少なかれ剰余価値の転化諸形態たる不労所得を取得する者は、みな「資本制的私的所有」者＝資本家の階級に属するのである。

第二に注意すべきは、労働者階級の規定についてである。自身の労働力を働かす対象の生産手段はなにひとつ所有

せず、また剰余価値の転化諸形態の分け前にあづかることも全くなく、ただ自身の肉体の中に持っている労働力を商品として売り、その販売価格である賃銀に依存して生活を支えている者――これが、まさに賃銀労働者である。賃銀労働者は、「所有」とは無縁である。独立生産者のように自身の個別的生産の利益増大に没頭することもなく、まして資本家のように他人の労働の搾取、最大限の不労所得の獲得にあくせくすることなど全くなく、むしろ、資本家の搾取の対象となるもの、したがって、これと真っ向うから対立するものである。だが、賃銀労働者は、「所有」と無縁であればこそ、「結合労働力」として偉大な力を発揮するのであり、したがってただこの階級だけが真に革命的な階級となりうるのである。それゆえ、賃銀労働者が「所有」と全く無縁であってまさに「無所有」だという点において、いっさいの「私的所有」者との本質的差異が示されている、といわなければならない。

だが、第三に注意しなければならない重要なことは、賃銀労働者が「所有」とは無縁の、自身の労働力＝商品の売手であるとしても、それぞれの労働者の経済状態はけっして一様ではなく、まさにピンからキリまである、という点である。日給一、五〇〇円の臨時工も、月給一二万円の課長も、はたまた警察機動隊々員も、いわゆる労働貴族も、みな同じ賃銀労働者であり、りっぱに労働者階級の成員である。ところで、労働力＝商品の売手は賃銀のほかに収入を得てはならないという規則はないのであって、多くの賃銀労働者は――その賃銀が買叩かれ、不安定であるためになおさら――種々の方法で収入の増加を図り、すこしでも生活の安定を得ようと努力する。もし、彼が賃銀の一部を積立てた貯金でやっと借家をつくり家賃を取得するとすれば、かれは、一面では賃銀労働者だが、他面では家主として不労所得を獲得する。その貯金を小口金融に廻して闇利子を稼げば、そのかぎりで彼は利子生み資本家の一面をもつことになる。株券、社債を買うばあいも全く同じである。いずれの場合にも、彼は、賃銀労働者階級の一員であり

ながら、なおかつ、他の一面において「資本家」的要素を――あるいは場合によっては、「独立生産者」の要素を――もつものとなる。かようにして、たとえば、利子、配当、家賃等の収入がふえて、それだけで相当な生活が十分賄えるようになれば、かれは、早晩、賃銀労働者であることをやめてこれらの不労所得にもっぱら――あるいは主として――依存することになる場合が多いのであって、このときには、かれはもはや「資本家階級」の一員になりかわったものと見なされなければならないであろう。いずれにせよ、「生産関係」は簡単ではなく、ことに人間はつねに多面的なものであり、つねに流動＝変化の過程におかれている点を、けっして見落してはならないのである。

さて、以上のような視点に立ってわたくしが示しているところの「階級構成」にたいして、榊氏がこれをどのように読みとり、どのようにこれを批判していられるか、――この点をつぎに検討してみよう。

六

榊氏は、拙著結章「総括」のうちのほんの一部分（㈠から㈥までのうちのわずか㈠と㈡の半分だけ）しか眼を通さず、㈡の後半から㈥までの重要な指摘は全然これを無視し、黙殺してしまっているばかりでなく、その、眼を通したはずのはじめの一部分でさえ、その内容をゆがめ、別のものにすりかえてしまっておられる。つぎに、明記されている原文を、榊氏がどのように歪曲し、すりかえていられるかということを、事実について検証することにしよう。ここにはその顕著なものだけを挙げるが、これによって読者諸君は、榊氏の独自の論法とその特異な「品性」とを十二分に理解されることと思う。

【1】（原文）「現実に『ひとにぎりの独占体』が(1)から(6)にいたるまでの各階層の構成部分の相当数をその支配下にしっかりとと

らえ、これを自己の支柱としているということは、まぎれもない事実である。」

（榊氏による改作）「山本氏の『批判』の骨格は、独占体は『ひとにぎり』ではなくて強大なものであり、……という点にある。」

【2】（原文）「賃銀労働者階級は、いうまでもなく『所有』とは無縁の、無産のプロレタリアートであり、その点で『私的所有者』とは共通なものをまったくもたず、しかも『資本制的私的所有』によって直接に搾取されるもの、これと対立しているものである。」

（榊氏による改作）「山本氏の『批判』の骨格は、……賃銀労働者階級は①から⑤までの私的所有者と対立しているという点にある。」

【3】（原文）「大衆投資家の中には、労働者、サラリーマンの小株主が相当数ある。これらの賃銀労働者の意識がプロレタリア的でなく、小ブル的であるのは当然である。」

（榊氏による改作）「山本氏によれば、『……大衆投資家の中には労働者、サラリーマンの小株主が相当数ある』というのであるから、賃銀労働者階級の勢力はいっそう小さなものになる。」

【4】わたしは、「構造改革論」者の「重大な欠陥」を七つ挙げて説明し、とくにその「独特の思考方法」について、「その根底にあるものは、プロレタリアートの歴史的役割についての理解の欠如、あるいはその役割の否定ということになるであろう」と、要約している。

（榊氏による改作）「ここから山本氏は、『構造改革』論者は独占資本の力を過小評価して革命を甘くみている、といった式の『批判』をしていく……。」「ところが山本氏は、問題の所在をすりかえて、独占体と労働者階級の力関係（それも純経済的な）[1]がどうかということをとりだし、一方の力を最大限に『強め』て描き、他方の力を最小限に『切りちじめ』『弱め』て描きだすことによって、『構造改革』論を批判したつもりになっている。」

（1）この「力関係」につけられた但し書―「それも純経済的な」―をよくごらんいただきたい。「諸階層のあいだの相互関係」についてのわたしの説明は、なんと、「独占体と労働者階級との純経済的な力関係がどうかということをとりだし」たものだそうである。小ブル的な発想法と俗物的解釈にとらわれてひたすら相手をやっつけることにだけ熱中すると、自分が「問題の所在をすりかえて」いるのがわからなくなり、「純経済的」という言葉の意味もわけわからなくなるものなのである。

【5】 わたしは、厳密に、「所有関係」によって「階級区分」をし、「非所有者」＝「労働力の担い手」の階級を賃銀労働者階級と規定している。

（榊氏による改作）「その結果はどうか。労働者階級は、生産（!?）と生産関係のなかで占めるその地位からではなくて、モノやカネを持っているかどうかによって計られ、なにも持たないものだけが純粋労働者階級だという『理論』にまで〝昇華〟されてしまっている」（!?—山本）。

【6】（原文）「賃銀労働者は、生れながらにして階級意識をもつものでは、けっしてない。また、賃銀労働者として生活し日常闘争をくりかえしているからといって、階級意識がひとりでに身についてくるものでもない。賃銀労働者が生れながらにもっているのは、むしろ小ブルジョア的意識である。……生活が苦しければ苦しいほど……その小ブルジョア的意識はますます根強いものになる。……賃銀労働者が資本主義の墓掘人としてのプロレタリアートの歴史的使命をはっきりとつかみ、その使命をはたす力を自覚し、そのための組織をうちたてたときに、はじめて階級意識をしっかりと身につけたことになる。……」

（榊氏による改作）「山本説にしたがっていけば、労働者は無一物になっていけばいくほど『革命的』になり、賃上げ闘争をやればやるほど『小ブル的』になるということにさえなろう。それは、例の教条主義的『窮乏待望論』[2]の再版であろう。だが、実際には、社債や社内預金をいくらかもっていても、労働者は労働者であり、それで労働者が小ブル化して社会変革に背を向けることに必ずなるわけ[3]でもない。」

（2） 「例の教条主義的『窮乏待望論』」をもっとも熟心に吹聴してまわったのがほかならぬ「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちであったことは、かくれもない事実である。かれらの「教条主義的『窮乏待望論』」にたいして、わたしは早くからその誤謬の摘発につとめているのであって、このことは、たとえば、拙著『労働賃銀』の第十章「賃銀闘争の意義」の第三節の「(4)、奴隷根性の克服」の項を一読していただければ、ただちにわかることである。

（3） この小細工——「必ずなる」——をよく注意していただきたい。社債や社内預金をもっている労働者がかりに一〇〇万人いたとして、そのうちの百人でも日共党員であれば、「社会変革に背を向けることに必ずなるわけでもない」といえるのである！ 事実はどうかといえば、「社債や社内預金」などあろうがなかろうが、さきの「(4)賃銀労働者階級について」の中でわたしが説明している「必要な条件」の欠けているところでは、かなりの「労働者ははじめから小ブル的意識をもち、社会変革に背を向けることに必ずなる」のである。

ここに列挙した若干の事例を見ただけで、榊氏が、拙著の中の明瞭な説明をどんなに意識的に歪め、すりかえ、こじつけしているかはあきらかすぎるぐらいあきらかであって、注釈を加える必要はないであろう。そこで、つぎに、一歩を進めて、右のような「改作」つまり歪曲、すりかえ、こじつけをなんら抵抗を感じることなく遂行できるという独特の「品性」を有しておられる「評論家兼哲学者」榊氏御自身の思考方法について、とりわけ当面問題となっている「階級区分」および「階級意識」にかんする氏の積極的主張について、すこしくたちいった検討を加えてみることにしよう。

七

第一に、「階級区分」について、とくに労働者階級の規定について。

榊氏は、つぎのように説明されている。

「労働者階級は、生産と生産関係のなかで占めるその地位から……計られる……。」

「労働者階級とは……、生産と生産関係の中での地位（なによりも、生産手段を所有していないがゆえに労働力を売って労働するという地位）から規定されるものであり、この地位がモノやカネを持てないという現象を規定するのである」（傍点—山本）。

読者諸君、榊氏がくりかえしのべたてている「生産と生産関係の中での地位」という文句に、どうか注目していただきたい。いったい、「生産関係」とは、なにか？　それは「生産における人間の社会的関係」である。それゆえ、氏が並べたてる文句——「生産と生産関係の中での地位」——は、「生産と生産における人間の社会的関係の中での地位」という、まぎれもない無意味なくりかえしであることがすぐわかる。ということは、このばあい、「生産」と

「生産関係」という二つの基本的な概念の内容も両者の関連もさっぱりわけわからず、二つ並べておけばなんとか当るだろうという思考方法が頭脳を占めているということである。このことは、「労働力を売って労働するという地位」という、無意味な「附け足し」によっても裏書きされている。「労働力を売る」ことは当然「労働する」ことをふくむものであって、「労働力を売って労働する」というのは、まのびしたくりかえしでしかないし、またこの二つの動詞は労働者の行為を示すものであって、労働者のおかれた社会的関係そのものを示すものではけっしてない。ここで特別の興味をひくのは、「この地位がモノやカネを持てないという現象を規定する」という文章である。榊氏はことさら、「現象を規定する」などという、「論理的表現」を用いているが、こういう論法は「自分でも全然理解できない迷文句を並べて良心的な読者をおどかしたり、感心させたりする」という、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の一常套手段を実によく示しているものである。いったい、「現象を規定する」ものとは、なにか？　それは、まさに「本質」でなければならない。だから、氏の文章を論理的に整理すると、「労働力を売って労働するという地位」が「本質」であって、「モノやカネを持てないこと」がその必然的な「現象」だ、ということになる。「労働力を売って労働するという地位」が「本質」だって?!　「モノやカネを持てない」がその「現象」だって?!　なんと、おそれいった「ヘーゲル」式迷論であろうか！　これによってみると、榊氏が、労働者が「モノやカネを持てない」ことは、「本質的な現象」、つまり「法則」だという主張を堅持していられることは明白である。わたしが「無所有」という文字を用いたのは、「生産手段の非所有」のみを示したものであること、わたしはいまだかつて労働者が「モノやカネを持っていない」などという、荒唐無稽なたわごとを述べたことは一度もないこと、――これらのことは、さきに明らかにしたとおりである。それゆえ、榊氏が、わたしにたいして　「労働者階級をモノやカネを持っているか

どうかで計っている」と非難しているのは、二重の意味で恥しらずなペテンだということがはっきりする。氏は、わたしが考えてもいないことを山本の主張だときめつけ、この山本の主張は完全な誤りだ、「なにも持たないものだけが純粋労働者階級だという『理論』にまで〝昇華〟されてしまっている」と非難を浴せながら、しかも自身は「労働者がモノやカネを持てない」のは本質的現象、法則だという主張をかかげて恬として恥じないのである！　「モノやカネを持っていない」という言葉の意味もろくろく考えず、相手にむりやりおしつけては「誤りだ、セクト主義者だ」・とわめきたて、同じ文句を自分が主張するときは完全に正しいのだとおしつける。このおどろくべき引廻し主義！　ここには、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」が、なんとよく顕示されていることであろうか！

ところで、ここに見逃すことのできない重大な問題をふくんでいるのは、榊氏が、ことさら「ついでにふれると」と言って、『共産党宣言』の中の「プロレタリアートは『鉄鎖以外に失うべき何物もない』という有名な言葉」を引用して、これにつぎのような注釈を附け加えていられることである、――「これは革命で失うものは『鉄鎖のみ』であるということであって、労働者は無一物であるということではない」。こういう注釈は、はたして正しいものといえるだろうか？　それは、完全に誤りであるばかりでなく、きわめて「危険な路線を指向している」ものである。第一に、榊氏の頭脳を占領しているのは、「モノやカネをもたないかどうか」、「無一物かどうか」という俗物的基準だけである。これは、小ブル的意識水準を端的に示している。第二に、「鉄鎖」の正確な意味が全然わからず、これをすっかり俗物的に歪めてとらえている。この「鉄鎖」という文字は実に千鈞の重みがあり、ここにマルクス主義の全内容が圧縮されて示されているといっても過言ではない。榊氏は、「ついでにふれると」などという言い方をして、さも自分は『共産党宣言』の内容によく通じているような見せかけをつくっていられるが、「鉄鎖」を「無一物」に結

びつけることしか考えられないようでは、かえってやぶ蛇というものである。榊君よ、よく聞きたまえ、この「鉄鎖」とは、「奴隷をつないでいる鉄鎖」のことなのだ。だから、この「鉄鎖」は賃銀労働者がまさに賃銀奴隷として眼に見えない鎖につながれていることを明示しているものなのだ。榊氏は「有名な言葉」とおっしゃるが、「鉄鎖以外に失うべき何物もない」というときの主語は、原文ではプロレタリアと明記されている（ディーツ版、マル・エン全集、第四巻、四九三ページ）。これをプロレタリアートと誤読していながら「有名な言葉」とは、りっぱなものである。しかも、この『宣言』の第一節「ブルジョアとプロレタリア」の終りには、つぎに示すように「奴隷」という言葉が明記されていて、資本主義がまさに賃銀奴隷制にほかならないことが明示されているのである。

「彼ら（ブルジョアジー――山本）が支配する能力をもたないというのは、自分の奴隷にその奴隷制のなかでの生存をさえ保証する能力がないからである。彼らが奴隷に養ってもらうのではなく、かえって彼らのほうで奴隷を養わなければならないような状態に、奴隷が落ちこむのをとめる力がないからである（前出、四七三ページ、傍点――山本）。

この「鉄鎖」という文字を見て、「マルクス主義の主要内容」（レーニン）である『資本論』の中の「有名な言葉」、――「ローマの奴隷は鎖によってその所有者につながれていたが、賃労働者は見えない糸によってその所有者につながれている。かれらの独立という仮象は、個人的賃雇主のたえざる変動と、契約という法的擬制とによって維持されるのである」（ディーツ版、第一巻、六〇二ページ）を、また、レーニンの「有名な言葉」、――「われわれは、資本主義のもとにおけるプロレタリアートにとって最良の国家形態として、民主的共和制に賛成する。だが、もっとも民主的なブルジョア共和制のもとでも、賃銀奴隷制が人民の運命であることを忘れる権利はわれわれにはない」（全集、第四版、第二五巻、三七〇ページ、傍点――山本）をすぐに想い起さない者は、マルクス・レーニン主義とはまったく無縁であ

る。そしてまた、賃銀労働者にたいして、あらゆる機会に、かれらがまさに賃銀奴隷であることをはっきり認識させ、その賃銀奴隷こそが賃銀奴隷制＝資本主義社会の変革の担い手であることを自覚させることに全力を傾けようとしないひとは、その名称のいかんにかかわらず、マルクス・レーニン主義を改ざんし、歪め、裏切る者といわなければならない。たとえば、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のうちの一「指導者」、高原晋一氏は、その著『賃金闘争』の中で、たいていの賃銀解説者が体裁上引用することになっているマルクス著『賃銀、価格、利潤』の中の有名な文章、――「『公正な一日分の労働にたいして公正な一日分の賃銀！』という保守的なスローガンのかわりに、彼らはその旗に『賃銀制度の廃止！』という革命的なスローガンを書きしるすべきである」（前出、全集、第十六巻、一五二ページ、傍点――マルクス）を引用して、

「したがってマルクスの『資本論』も『賃労働と資本』もその他すべてが、この最終の目的のために書かれたものにほかなりません。いいかえれば『労働者が搾取の鎖を断ち切る』、『革命によって権力をにぎる』ことを念願して、そのためにすべての英知をかたむけたものといえます。」（前出、一一八ページ、傍点――山本）

と説明していられるが、氏の著書の中のどこを探してみても「賃銀奴隷制」という言葉もなければ、それらしい説明も全然見当らない。マルクスの「鉄鎖」は、まさに「賃銀奴隷をつなぐ鎖」であって、「搾取の鎖」などという珍妙なものではない。高原氏は、著書のいたるところで、「大衆の生活体験、生活感情、闘争経験などから出てくる大多数の要求のとりまとめこそが、もっとも妥当なものだということができます」とか、「労働の質と量に応じての賃銀」とかいう題目を唱えていられるが、この事実そのものによっても、高原氏が、さきの二つのスローガンの意味内容を全然理解しないでお体裁のためにかかげたものだということは、明白である。「公正な一日分の労働にたいして

公正な一日分の賃銀！」は、歴史の一時期において「保守的」なものとなったとはいえ、それはプロレタリア的なスローガンであったのであり、しかも、りっぱに一定の歴史的役割を担いえたものである。これにひきかえ、「労働の質と量に応じての賃銀」などというのは、これより数十歩も後退したもの、まさにブルジョア的・反動的スローガンというのほかないしろものである。「賃銀奴隷制を暴露し、賃銀労働者の小ブル的意識をプロレタリア的意識につくりかえる」という、マルクス・レーニン主義者にとっての根本課題を忘れはてて、「大衆の生活体験」を「第一の基本」に据え「自然発生性への屈従と拝跪」（レーニン）に終始して万事小ブル的、俗物的解釈で事をすましている連中が、かれら自身の改ざん、歪曲、裏切を暴露しているマルクスの当の文章をかかげて、例によってこれで自分たちの「権威」を大いに高めるものと考えているのは、なんとみじめで、滑稽なことであろうか！

八

第二に、「階級意識」の問題について。

本来小ブル的意識を身につけている賃銀労働者がどうして階級意識をもつようになるかは、拙著結章「総括」の中の「㈣賃銀労働者階級について」の項で詳細に説明している（本稿の「三」参照）が、榊氏は、その内容を一読する労すらはぶいて、もっぱら改ざんと歪曲にいそしまれ、たとえば本稿「三」の末尾にみられるように、「例の教条主義的『窮乏待望論』の再版」とこじつけ、自身は、賃銀労働者は「賃銀労働者として本来当然に階級意識、革命的意識をもつべきもの」だとの主張を堅持し、「社債や社内預金をいくらかもっていても、労働者は労働者であり、それで労働者が小ブル化して社会変革に背を向けることに必ずなるわけでもない」といわれる。では、なぜ、賃銀労働者はひとり

でに階級意識、変革意識をもつようになるのか？といえば、榊氏は、こう説明される、――「資本主義的生産関係はそれほど『甘い』ものではない。労働者階級の基本的地位が、経済的・社会的諸矛盾によって、また前衛党の活動によって、かれを社会変革の方向に前進させていくのである」と。この中で、「それほど『甘い』ものではない」という氏の言葉に、どうか注意していただきたい。「労働者階級の基本的地位」とは、さきにみたように「生産と生産関係の中での地位」つまり「生産手段を所有していないがゆえに労働力を売って労働するという地位」であり、簡単にいえば、「労働力を売り賃銀で生活している」という「地位」であって、しかもその「地位」たるや、榊氏によれば、「モノやカネを持てないという現象を規定する」ものにほかならない。だから、労働者が本来ひとりでに階級意識、変革意識をもつようになるのはどうしてかといえば、それは、資本主義的生産関係がきびしいもので、労働者のおかれている「地位」によって「モノやカネを持てない」ということになるために、「経済的・社会的矛盾によって」その経済状態も社会的地位もますます苦しいものになっていくので、そのためにひとりでに労働者は社会変革の方向に進んでいかざるをえないのだ、というわけである。つまり、この榊氏の説明は、氏がさきにわたしにむりやり押しつけた「労働者は無一物になっていけばいくほど『革命的』になる」という主張と全く同じもの、「例の教条主義的『窮乏待望論』の再版」という、氏自身わたしにおしつけたレッテルにぴったりのものである。ひとにたいして、根も葉もないこじつけのレッテルをはりつけておいて、さて今度は自分でそのレッテルにぴったりの同じ主張をかかげて平然としているとは、なんと恥しらずで厚かましい「評論家兼哲学者」であろうか！

ところで、榊氏の断定――「それほど『甘い』ものではない」――にもかかわらず、「社債や社内預金をさせられている労働者」が「大量」にのぼっているそうであるし、事実、賃銀労働者のかなりの部分までが、テレビあり、レ

ジャーあり、マイ・カーあり、プロ野球、プロレス、麻雀の楽しみありということになると、榊氏の「モノやカネを持てないという現象を規定する地位」という珍妙なものも大分あやしいものになり、「最賃制」と「大幅賃上げ」で「生活の向上と保障」を「直接」獲得しようという方向に、つまり文字どおりの構造改革の方向に、前進していくことになる公算の方がはるかに大きいものとなるであろう。

榊氏はいとも簡単に「社会変革の方向に前進する」などと述べたてているが、いったい、「社会変革」ということの内容をすこしでも真剣に考えたことがあるだろうか？　ただ「生活が楽でない」とか「経済的・社会的矛盾」があるからとかいうことでは、「社会変革」はとうてい意識に上るものではない。「変革意識」とは、「社会変革」をなんのために、どういう方向をめざして、どういう方法でやりとげるかということがはっきり把握されたときに、しかも、その「変革」のために必要な力と組織とを自分たち自身が持っていることを自覚したときに、はじめて出来あがったことになるものである。それゆえ、労働者が「変革意識」をもつということは、この資本主義社会の運動法則とその現在の諸条件の下での貫徹の仕方をしっかりととらえ、その中での「賃銀奴隷」としての自身の地位を把握し、その賃銀奴隷がまさに賃銀奴隷であるがゆえにこそ賃銀奴隷制の打倒と社会主義社会の建設という歴史的使命を担う唯一の徹底的な革命的階級であるということ、を明確にとらえたときに、はじめていえることである。現在の体制のもとで「最賃制と大幅賃上げ」によって「生活の向上と保障」を得よう、「もっとより良い生活を」得ようと考えている労働者が、「この体制のもとではどうしても『生活の向上と保障』はありえない。どんな犠牲を払ってもこの体制を根本的に変革しなければならない」などという「意識」を、いったい、どうしてもつようになるであろうか？　高原氏や榊氏のような「わが国のマルクス・レーニン主義者」さえ、賃銀奴隷制という基本的概念をすっかり忘れは

てて「ブルジョア民主主義」をふりまわしている現在、労働者たちがこの体制のもとで「より良い生活」を中心とした「生活体験」や「闘争経験」をいくら積んだとて、どこに「変革意識」の生れる根拠があるというのか？

榊氏は、「また前衛党の活動によって」という言葉をつけたすのを忘れていない。だが、「前衛党」にもいろいろあるのだ。修正主義の大先輩、カウツキーの指導した第二インターナショナルの諸党も、榊氏が一九六一年から六二年にかけてさかんに賞めちぎっているフルシチョフの率いるソ連共産党も、りっぱに「前衛党」であるのだ。だが、本当の前衛党、真にマルクス・レーニン主義党の名に値するのは、ただ「**規律があり、マルクス・レーニン主義の理論で完全に武装し、自己批判の方法をとる、人民大衆と結びついた党**」だけである。自分の意見とちがっているものは同じ革命の支持者であっても「亡きものにする」という「規律」ばかりをふりまわす「指導者」たち、「国内のすべての階級勢力とその相互関係とを、厳密に、客観的に考慮に入れ、評価する」ことが「第一の要件」だということが全くわからず、「勤労大衆がブルジョア的な観念、習慣、伝統に支配されている」事実も、「御用組合と労働貴族の繁昌」の事実も「正視」することができずまた「正視」しようともしないで、労働者は「労働者という地位」にありさえすれば「大衆の生活体験、闘争経験」によってひとりでに「社会変革の方向に前進していく」はずだと説明してすましているような「指導者たち」、マルクス経済理論を根本から歪曲する最悪の修正主義理論である「宇野理論」と徹底的にたたかうどころかその亜流分子を「指導的理論家」として抱きこんでいるような「指導者」たち、資本主義の運動法則の正確な把握、および賃銀奴隷制の本質とプロレタリアートの世界史的役割についての明確な認識をたえず真剣におしひろめることによって労働者階級を完全に「武装」することに必死の努力を傾けることなどすこしも考えず、もっぱら「大衆引廻し主義＝大衆追随主義」で「票集め」に腐心しているような「指導者」たち、――こう

した「指導者」たちの牛耳る「前衛党の活動」によっては、労働者階級は「社会変革の方向に前進する」どころか、改良主義、修正主義のぬるま湯の中で骨抜きにされてしまうのが落ちである。

「労働者であれば、当然にその地位によって、生活体験、闘争経験によって、変革意識、階級意識をもつものだ」[4]という、この安直きわまる考え方をば、レーニンは、「自然発生性への屈従と拝跪」としてこれを完膚なきまでに批判したのであるが、そのさいカウツキーの「……社会主義的意識は、プロレタリアートの階級闘争のなかへ外部からもちこまれた或るものであってこの階級闘争のなかから自然発生的に生れてきたものではない……」という主張をば、「きわめて正しくまた重要な言葉」だと述べてこれを引用し、つぎのように明確に教示しているのである。

「かりにも労働運動の自然発生性のまえに拝跪することは、かりにも『意識的要素』の役割、社会民主主義派の役割を軽視することは、とりもなおさず――その軽視する人がそれを望んでいようといまいと、それにはまったくかかわりなく――労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響を強めることを意味する」（全集、第四版、第五巻、三五四ページ、傍点――レーニン）。

（4）これと全く同じ考え方を、つまり「自然発生性への屈従と拝跪」を典型的に示しているのは、今年四月二十九日付「赤旗」に掲載された「評論員」の論文、『極左日和見主義者の中傷と挑発』である。この論文は、これまで榊論文の吟味によって明白にされた「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」をさらに一段と顕著に示しているものである。この「評論員」は、たとえば、「わが国の有業人口の構成」について、「労働者五六・二パーセント、農漁民二五・二パーセント、勤労市民一二・九パーセントとなっており、労働者階級は、すでに住民の過半数を占めている。……わが国ではプロレタリアート、半プロレタリアートはすでに優に人口の約四分の三という、圧倒的な比重を占めている」として、「反帝反独占の民主主義革命」は、「直接資本主義制度の廃止をめざす社会主義革命ではな」いから、当然、「この革命は、労働者、農民をはじめとして、勤労市民、知識人、あるいは婦人、青年、さらには、中小企業家などブルジョアジーの一定の部分をふくめて、圧倒的

多数の人民の利益に合致するものである」と述べたて、これによって「国会で安定した過半数が得られれば……」という、フルシチョフ式棚ボタ戦術論を「合理化」しようと、けんめいにつとめている。こういう連中にかかると、戦後二十二年もたって「圧倒的多数の人民」がまだ「前衛党」を支持していないし、そのために「国会で安定した過半数」どころかほんの「五ないし六」の数しか占めていないという現状は、ひとえにかれら「多数の人民」が「人民の利益」を自覚しない「愚か者」か、または「人民の利益を裏切る者」に同調している「救いがたい連中」であるからだ、としてかたづけられてしまうのである。この「評論員」の論文は、榊氏によって示された「品性」を実に完璧に示したものであり、しかも、右にみたように、フルシチョフ報告をそのまま「創造的に」盗用した棚ボタ式戦術論を「合理化」するために、各種の論理的手法が「応用」されている点で見逃すことのできない価値をもっているので、行論においてあらためて必要な吟味を加えることにしよう。

このように、「自然発生性への屈従と拝跪」および「理論軽視」という点をついて、日和見主義、修正主義と徹底的にたたかい、マルクス主義者は「ほかならぬ偏狭の精神を身につけなければならないのだ」（前出、三五八ページ）と力説している当のレーニンが、その批判の対象となった連中から、「哀れな教条主義者！」（前出、三七八ページ）とか、「この悪辣な教条主義者」（前出、四〇六ページ）とかいう名誉あるレッテルをおしつけられているという歴史的事実は、「教条主義」とか「セクト主義」とかいうレッテルをはりつけることに専念しているわが榊氏の「品性」のほどを啓示するものとして、まことに意味深長といわなければならないのである。

九

第三に、中間階層の問題について。

本稿の「三」の末尾にかかげた榊氏の攻撃論文の最後のパラグラフは、中間階層についてのわたしの説明を批判し、同時に榊氏自身の見解をも示しているものだが、その中味を以下、簡単に検討しておくとしよう。

①榊氏は、いきなり「山本氏が独占体の『支柱』としてえがく中間諸階層」というふうに書き出しているが、これは、氏の「品性」にふさわしいすりかえである。わたしは、さきの「㈠諸階層のあいだの相互関係」の中で、「現実に『ひとにぎりの独占体』が(2)から(6)にいたるまでの各階層の構成部分の相当数をその支配下にしっかりととらえ、これを自己の支柱としているということは、まぎれもない事実であり、……」と述べて、独占資本の「支配系列」に組みこまれた「中小企業主の大群と賃銀労働者の膨大な数」を指摘しているのである。榊氏は、この「相当数」という文字を意識的に削除し、「支配系列」という言葉にも、またその事実にも、まったくふれることをしないで、右のようなすりかえ文章だけをかかげているのである。

②榊氏は、「山本氏は、所有関係が独占資本主義の諸関係のなかに組みこまれているということから、『ごく少数のもの、その最下層のうち一部のものだけ』をのぞいて他のすべてを否定的に見ている」と書いている。だが、榊君よ、「所有関係が独占資本主義の諸関係のなかに組みこまれている」というのは、いったい、どういうことか？　はっきり説明してみたまえ。「独占資本主義の諸関係」とは、どういう関係のことか？　「所有関係が……諸関係のなかに組みこまれる」などというキテレツなことが、いったい、言葉だけとしても成り立つだろうか？　こんなデタラメな錯乱した文句で、榊氏が、わたしの「支配系列」についての説明を「理論的に表現したもの」だなどと考えているとすれば、まさに噴飯ものである。こういう錯乱した小細工は、榊氏自身が「所有関係」も「諸関係」も、みなわけわからずという「品性」の持主だということを自己暴露するだけである。このような錯乱したタワ言を見逃すとしても、右の榊氏の文章がきわめて悪質な改ざんとすりかえでしかないという事実は、明白である。わたしは、さきの「㈢『中間階層』について」の中で、とくにその「小ブルジョア的革命性」について約一ページを費やして説明して

いるのだが、この明白な説明が「評論家」榊氏の眼にはいらなかったとは、まさに「斜視(やぶにらみ)ののみとり眼」というほかないしろものである。いまからでもおそくはないから、はっきりと眼をあけて、そこに記されているつぎのくだりだけでも、しっかりと読んでみたまえ。

「独占資本主義のもとでは、これらの小所有者、小経営主の経済的地位はずっと不安定になり、独占資本による収奪・搾取はずっとはげしいが、そのために右の小ブルジョア的革命性、無規律性、動揺性は、なおいっそう強められる。プロレタリア的意識をもち確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつものは、そのうちのごく少数のもの、その最下層のうちの一部のものだけである。」

榊氏が「中間諸階層までもが、独占体の圧迫と収奪に反抗する側面をもっている」などという、きまり文句を並べるよりずっと前に、わたしは、右のように明確に事態を――階級的「位置づけ」との関連において――説明しているのである。榊氏の得意とする「斜視ののみとり眼」は、この「プロレタリア的意識をもち確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつものは、そのうちのごく少数のもの、その最下層のうちの一部のものだけである」という明白な文章をば、「正視」することがどうしてもできなかったか、あるいは「正視」することをどうしても承知しなかったか、そのどちらかであったことはうたがいところである。肝腎の文章をすっかり削りとって紹介するとは、正真正銘の改ざんであり、ペテンである。わたしは、「一部」をのぞいて他の者は「プロレタリア的意識」をもつことはできないし、「確固たる革命的闘争を遂行する意志と能力」はもてない、と述べているのである。だが、「独占資本による収奪・搾取がずっとはげしい」ために、また外国帝国主義による圧迫と収奪がしだいに重圧を加えてくるために、これらの抑圧、収奪、搾取に抗して「小所有者」としての自分の地位を守るために、「反帝反独占のたたかい」に踏みいらざるをえない面をもっているのであって、ここに、これら中間階層の統一戦線への参加の可能性と必要性

とが当然生じてくることは、いうまでもないところである。榊氏はこのような「独占体の圧迫と収奪に反抗する側面」を全くもっていないとわたしが主張しているのだと見せかけるために、ことさら「否定的にのみ見ている」と書き立てているが、これは氏の「品性」にぴたりのペテン論法である。わたしが「否定」しているのはその一部をのぞいて、「プロレタリア的意識をもつこと」と、「確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつこと」なのである。

③わたしが「一部をのぞいて他の者」は「プロレタリア的意識をもち、確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつ」ことはできないというように「否定的に見ている」のにたいして、榊氏は、「これは民主商工会の活動を見てもわかるように事態の発展とはかなりちがっている……」と反論している。つまり、榊氏は、「一部」だけではなく、わが国の「小工業者、小商人、手工業者、農民」の広汎な層のうちの相当部分までもが「プロレタリ的意識をもち、確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもっている」ことが、「事態の発展」によって明らかになった、「民主商工会の活動」がそれを「実証」していると、主張しているわけである。

わたしは「民主商工会の活動」がそれ相当の成果をあげているという事実を「否定」するものではない。だが、その成果は、正確に評価する必要があると考える。その「活動」の主眼は、「小工業者、小商人、手工業者」の「経営と生活」を「収奪と圧迫」から守るというところにある。「小工業者、小商人、手工業者」などの「商工業者」の「経営と生活」を守るたたかいが、いったい、どうして、かれらの頭の中に「プロレタリア的意識」を生みだし、プロレタリアと同じように「確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつ」者につくりあげることができるというのか？　「収奪と圧迫」から守るたたかいは独占資本と外国帝国主義にたいするたたかいの一部分としてまことに有意義であり、そういうものとして、これをただしく発展させ、プロレタリアートと真の前衛党の指導する反帝反独

占の統一戦線の重要な一翼にきづきあげることが絶対に必要であるが、そのためには、それらの「最下層の一部」が「確固たるプロレタリア的意識をもつ」までになっていなければならないし、これらいっさいの事業を正しく効果的に達成するためにはなによりもまず、「**規律があり、マルクス・レーニン主義の理論で武装し、自己批判の方法をとる、人民大衆と結びついた党**」が、「**確固たる見透しをたて、それに向って献身的に奮闘する党**」があって、労働者階級をばその歴史的使命を遂行するにふさわしい真の中核的革命勢力に仕立てあげているということが、第一の決定的要件となっている。「最賃制」とか「大幅賃上げ」とか「税金減免」とかいうような経済的改良でもっぱら「票集め」に重点をおき、賃銀奴隷制を暴露した科学的理論で武装することなど全く放り出してもっぱら「勤労大衆の生活体験、闘争経験」を基準とした「自然発生性への屈従と拝跪」に終始して相変らずの「大衆引廻し主義＝大衆追随主義」に執着している「指導者」たちの「党」があるところでは、「中間階層」どころか、肝腎の労働者階級すら「プロレタリア的意識をもつ」ことはできず、「確固たる革命的闘争を遂行できる意志と能力をもつ」ことはとうていできず、いたずらに御用組合と労働貴族の跳梁をほしいままにさせ、統一戦線はただのお題目に終らざるをえないということになるのである。

××　　××　　××

さて、これまで四回にわたっておこなってきた詳細な検討によって、拙著『構造改革論批判』にたいする榊氏の批判の内容がどのようなものであるかは、ほぼあますところなく明らかにされたことと思う。それと同時に、一部の「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちの「品性」がそもそもどういうものかという点も、おおよ

そ明確にされえたと思われる。だが、理論的見地からみて、とくに重要なのは、榊氏とわたしとのあいだで、当面の「革命の性格」についての見解が根本的にいちがっている点が明確にされたことである。

榊氏らの主張するのは、「反帝反独占」の「人民の民主主義革命」「民族民主統一戦線」である。わたしが現在支持しているのも「反帝反独占」、「人民民主主義革命」、「民族民主統一戦線」である。形の上では、全くちがいはない。（もっとも、榊氏が、わたしの支持するところが皆目わからず、まさに斜視ののみとり眼よろしく、片言隻句をとらえて「プロレタリア社会主義革命」の教条主義的主張者と思いこみ、考えられるかぎりの罵言やレッテルはりに狂奔した事実も明るみに出たのであるが。）だが、榊氏の主張する「変革の性格」とわたしの支持するそれとは、その内容は根本的にことなる。それが根本的にちがうのは、まさに「変革の道」が全くちがうからである。榊氏らの主張する「道」は、「平和的・民主的方法」であり、フルシチョフ式棚ボタ戦術論であるが、わたしの支持するのは、「強力と独裁の方法」であり、「マルクス・レーニン主義の基本原則」にそったものである。拙著『構造改革論批判』の主たる課題のひとつは、右のような「平和的・民主的方法」の反レーニン主義的本質の究明にあったのであって、わが榊氏において、その「品性」にふさわしいいっさいの反応――「権威的」攻撃、レッテルはり、すりかえとペテン、難癖つけとおどし――が露呈されざるをえなかった客観的根拠も、その点に存すると考えられるのである。

そこで、つぎに、正しい批判のあり方を示すために、一歩をすすめて、榊氏自身が修正主義とどのようにたたかってきたかを追究し、榊氏らが「構造改革論」を「なしくずし革命論」とする批判が当をえたものであるかどうか、フルシチョフ式棚ボタ戦術論とこれにたいする「イタリーの道」を背景とする「構造改革論」とでは、そのいずれが「マルクス・レーニン主義の原則」により多くそったものか、あるいはより多く背反したものか、という点にも分析

のメスを入れることにしたいと思う。こうした論究を、事実に即して正しくおしすすめることによって、榊氏らによる「教条主義批判」なるものの客観的意義もおのずから明らかにされると思われるが、当面、科学的理論の研鑽にたずさわる者が念頭におくべきは、なによりもまず、「変革の道」の差違の根本的意義を解明することを通じて、現在の諸条件のもとでわれわれにとって真に正しい「人民解放の道」はどこに求められるべきか、真の「統一戦線」はどのようにして築きあげられるべきかという、緊切な課題に答えるための大切な手がかりをつかむことである。

（一九六七・九・三〇）